

1・2・3・4部会 会場：浜松市立萩丘小学校 小学2年生 「くりかえしを見つけよう」

題材を通して、音楽の仕組み「反復」に重点を置いて題材構想を作成されていました。既習の確認では、旋律やリズムに「反復」を用いられていたことや、「終わるリズム」と「続くリズム」で違いがあったことについて、子供たちから自然とポイントが挙げられました。また、前時でおまつりのイメージについて話し合っていたことから、リズムづくりへの意欲が高まり、どの子も進んでリズムカードを並べていきました。グループ活動では、和太鼓を使って自分で考えたリズムを楽しそうに発表し合っていました。全体では、2つのグループの発表後、「どうして『盛り上がる』リズムに聞こえたの。」



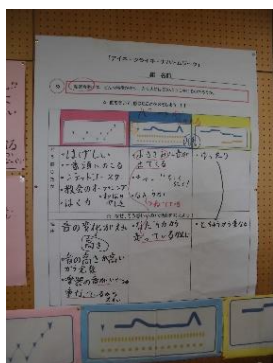
という先生の問いに対し、「『ドコドン』や『ドンドン』があるからだよ。」とリズムに注目した意見が出されました。授業を通して、リズムカードや大事な言葉カード、グループ活動のやり方など、多くの提示物が出されたり、本物の和太鼓やICTを取り入れたりするなど、山下先生の事前準備の多さに驚かされました。



授業後のグループ協議においても、山下先生の様々な手立てを参考に、各校の子供たちの実態に照らし合わせながら、効果的な手立てや他の手立てなど意見を出されていました。鑑賞教材や歌唱教材の順番を工夫された題材構想から低学年の音楽づくりの楽しさや難しさを共有しました。子供たちの生き生きとした表情から「楽しい音楽づくり」活動の意義を強く感じた研修となりました。

5・6・7・8部会 会場：浜松市立初生小学校 小学5年生 「オーケストラの紹介文を作って発表しよう」

授業者の坂根先生は、難しい「鑑賞」を取り上げ、題材構想を工夫し、「アイネクライネナハトムジークから祝典序曲、そして音楽づくり」という流れで授業を組み立ててくださいました。本時では、前々時と前時に聴き取ったことを生かし、「曲の感じの変化の理由を音色や旋律に着目して考える」という学習を行いました。グループで話し合い、同じ旋律でも変化して聴こえる理由を考え、ホワイトボードにまとめていきました。



研究協議で

は、子供たちがどんどんこの祝典序曲が好きになっていったことが分かる、題材構想を工夫し「聴く」ことを中心にしたことが良かった、音楽室の壁にたくさん貼られた視覚的な支援が分かりやすく良かったという意見が多く挙げられました。一方で、せっかく前時で「どんな感じがする」という学習をしているので、それを生かして『「どんな感じ」から、なぜ＝要素を考えていく』と良いのではないか、という意見や、言葉で表したことを再度音で振り返ることがで

きるように区切った音源をタブレットで送っておく、ホワイトボードだと見にくいいため ICT を活用して他のグループの意見を見ることができるようになる、など ICT を活用していくとさらに良くなるのではないか、という意見も出ました。

音楽の授業改善に向け充実した研修となりました。『子供たちが個別に獲得した「感性」が協働的な学びによってより磨かれていく』そんな授業を今後も目指していきたいと思えます。

**中学校部会 会場：浜松市立高台中学校 中学1年生の「音楽や声の特徴を生かして、民謡を味わおう」**

学習指導要領では、わが国の音楽における指導について「その民謡の特徴を表すための言葉の発音、節回しなどを歌い試しながら、曲種に応じた発声との関わりを捉えていく」ことの重要性が謳われています。今回の授業研究では、北海道民謡『ソーラン節』の地声とコブシに着目し、民謡らしい歌い方を追究する活動を行いました。生徒たちは、高音域・中音域・低音域の3つの声域グループに分かれ、自分たちの歌を録画して発声を確認したり、コブシの入れ方を話し合ったりしながら、ニシン漁獲量 No.1 になるような「よりよい唄い方」を目指します。グループ学習の中では、「コブシを入れているつもりだけれど、あまり感じられない」、「伸ばすところだけでなく、音の変わり目でコブシを入れたほうが良いと思う」といった建設的な意見も多く出され、最後に練習の成果を発表する時にはそれぞれのグループが堂々と唄う姿が見られました。また、授業者の伊東先生が長さの異なる尺八を使って各グループの旋律を吹き、生徒が歌いやすくなるように支援をしたり、実際に三味線を調弦して伴奏をしたりと、教師の専門性を生かした「生の音」に触れさせることによって、より題材への理解が深まりました。



授業後のグループ協議では、①生徒に「民謡らしい発声」を捉えさせるための手立ては適切だったか、②生徒用タブレットや図形楽譜（楽譜の代わりに音程や音の長さを図で示したもの）を活用した支援は本時の目標達成に適切だったか、の2つの視点で、授業の本質に迫る話し合いが行われました。授業の導入で活用した範唱音源や、伊東先生による生演奏（尺八、三味線）の質の高さが、生徒が主体的に学びに向かうことに一役買っていること、図形楽譜や録画した映像といった「視覚的な支援」が、自分たちの歌い方の良い点と課題を見直すために有効であったこと等が話題に挙がりました。一方で、グループ活動で練り上げたものを評価することの難しさが授業の課題として挙げられ、評価の観点や評価規準についても綿密に計画されるべきという意見も見られました。

我が国の音楽を「敷居の高いもの」であると考えている生徒も少なくありません。その音楽が生まれ、ここまで歌い継がれてきた伝統や歴史を、まずは教師自らが正しく知り、理解し、実際の音や実体験を通してよさや特徴を生徒に伝えていくことができるよう、音楽科として絶えず研修を積んでいくことの重要性を再確認しました。

